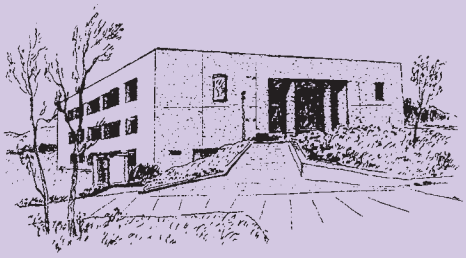
福島大学附属図書館報

書燈



No.49 2014. 7. 1 発行

〒960－1293　福島市金谷川1番地
TEL（024）548－8087
http：//www.lib.fukushima-u.ac.jp/
携帯電話版
http：//www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm
福島大学附属図書館

館長就任のご挨拶

附属図書館長　千葉　悦子

この4月から図書館長を務めることになりました。図書館を利用する側から管理・運営する側になって、大学図書館の役割がますます重要なものになっていることに気づかされます。

〈情報化が図書館の役割を変える〉

まずは情報のデジタル化が急速に進展してきたことです。かつては図書館でカードを1枚1枚めくりながら文献検索をしたり、国立国会図書館から出版されている雑誌記事索引をチェックして当たりを付けたものですが、今日では学術雑誌のかなりの部分がオンラインで入手することが可能になり、瞬時に私たちの手元に届くようになりました。革命的といっても良いほどの変化です。もっとも、カード検索は研究分野とは直接関わらない文献や思わぬ資料を掘り起こす機会でもあり、知的好奇心がそそられる楽しい時間でもありました。

ところで、学生にゼミや卒業研究で扱う関連文献や資料を収集するように指示すると、ヤフーやグーグルで検索して国の答申や自治体等のHPで提供する情報を収集し、「関連する論文や本は見当たらなかった」と答える学生が少なくありません。開架図書の閲覧と所蔵図書をパソコンで検索をする程度であれば、そうなるのも頷けます。

ヤフーやグーグルが全ての情報を集約していると思っている学生が多いのです。大学図書館が知識世界を広げる器であることを伝えていかなければなりません。必要な情報や知識を収集し、使いこなすスキルの支援も重要になってきます。

〈学習支援のための空間としての図書館〉

大学図書館が求められているのはそれだけではありません。大学の大衆化が進む中で、「学ぶ」主体を育てることが重要な課題となっています。つまり、従来行ってきた知識の伝達・注入を中心とした講義形式による学びから、ディスカッション等の対話型学習や実習・実験等の体験型学習を通じて、学生と教員、あるいは学生同士の相互の学びから課題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングへの転換が求められています。

しかも、今日、経済のグローバル化、少子高齢化の加速化、原発災害によるコミュニティの解体など予測困難な地球規模の問題群が私達の前に立ちはだかっています。これら難問題に立ち向かうには、これまでの枠組みにとらわれずに世界を見通しながら、地域社会を切り拓く「知の再構成」が求められており、学生がその一翼を担う存在となることが期待されていると思います。現に震災後、学生たちが取り組んだフィールドワークやボランティアには「新たな知の再発見」の芽が見られます。

こうした試みの多くは学類教育が中心ですが2012年から館内に個人学習やグループで学習できるラーニングコモンズを設置しました。学習相談にはアドバイザーの院生が対応しています。とはいえ、スペースに制約があります。学類教育との有機的関係の構築も今後の課題です。

〈学習支援の拠点センターを目指して〉

今年度は図書館利用が制限され、ご不便をかけることになりますが、図書館の増改築の工事終了後には学術情報基盤の提供を核に、文字通り「学習支援の中核的センター」としての役割を果たしたいと考えています。ご意見・要望をお寄せください。共に創り上げましょう。

附属図書館　増築改修工事

学術情報課 情報サービス担当

福島大学附属図書館では、平成24年度国立大学法人等施設整備実施事業補正予算の採択により、昨年度から増築改修工事を開始しています。この工事は、「学術情報メディア棟」（仮称、以下新棟）の増築にとどまらず、既存の図書館棟の大規模改修を伴うものとなっており、次の意図をもって実施しています。

(1)新棟を図書館と総合情報処理センター（以下IPC）に連結させることによって、書籍と電子情報のハイブリッド環境及び人的学習支援機能の強化を図り、来館する方が学びの刺激を感受できる環境を提供する。
(2)学内の多種多様な資料群を集中的に保管し、公開・展示を通じて、資料群の歴史的価値を再認識する機会を提供する。
(3)飲食コーナーの環境改善を図りつつ、従来から学習支援活動に取り組んでいる大学生協との連携を目指す。
(4)書庫を増設し、今後を見据えた収容力を確保するとともに、来館者の利便性向上を考慮し、震災関連資料をはじめ蔵書・情報機器の再配置を行う。

工事に至るまでの経緯として、2000年代に入ってから当館が新棟増築構想を立案し、学内での検討や文部科学省との折衝を進めてきたことが挙げられます。当初の計画は、①オープンスペースにICT機器を配置した学習空間の整備　②学内資料群の一元管理　③IPCと当館の連携強化を意図したものでしたが、現在進行中の計画は、従来の構想に①ラーニングコモンズを中心とした学習支援機能を拡充する　②震災資料と向き合い、地域の復興を担う人材を育成するという2つの要素を加えたものとなっています。

「ラーニングコモンズ」は、ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）では、「図書館や大学などの施設で自学学習をする利用者の利用目的や学習方法にあわせ、図書館資料やICT（情報通信技術）を柔軟に活用し、効率的に学習を進めるための人的な支援を含めた総合的な学習環境」と説明されています。当館では従来から学習機器の増設や「シラバス掲載参考図書」「学びのナビ」などの図書コーナーを特設することによって学習環境を改善してきましたが、自学学習（アクティブラーニング）と人的支援を実現するため、既に2012年度からラーニングコモンズを試行的に設置・運用しています。

また、震災資料については、東日本大震災後、福島で学び生活する方々に資することを目的として、「震災関連資料コーナー」をラーニングコモンズとほぼ同じ時期に開設しています。このコーナーは、本学「うつくしまふくしま未来支援センター」と協働で収集した資料群で、今後も拡充し続けていく見込みです。

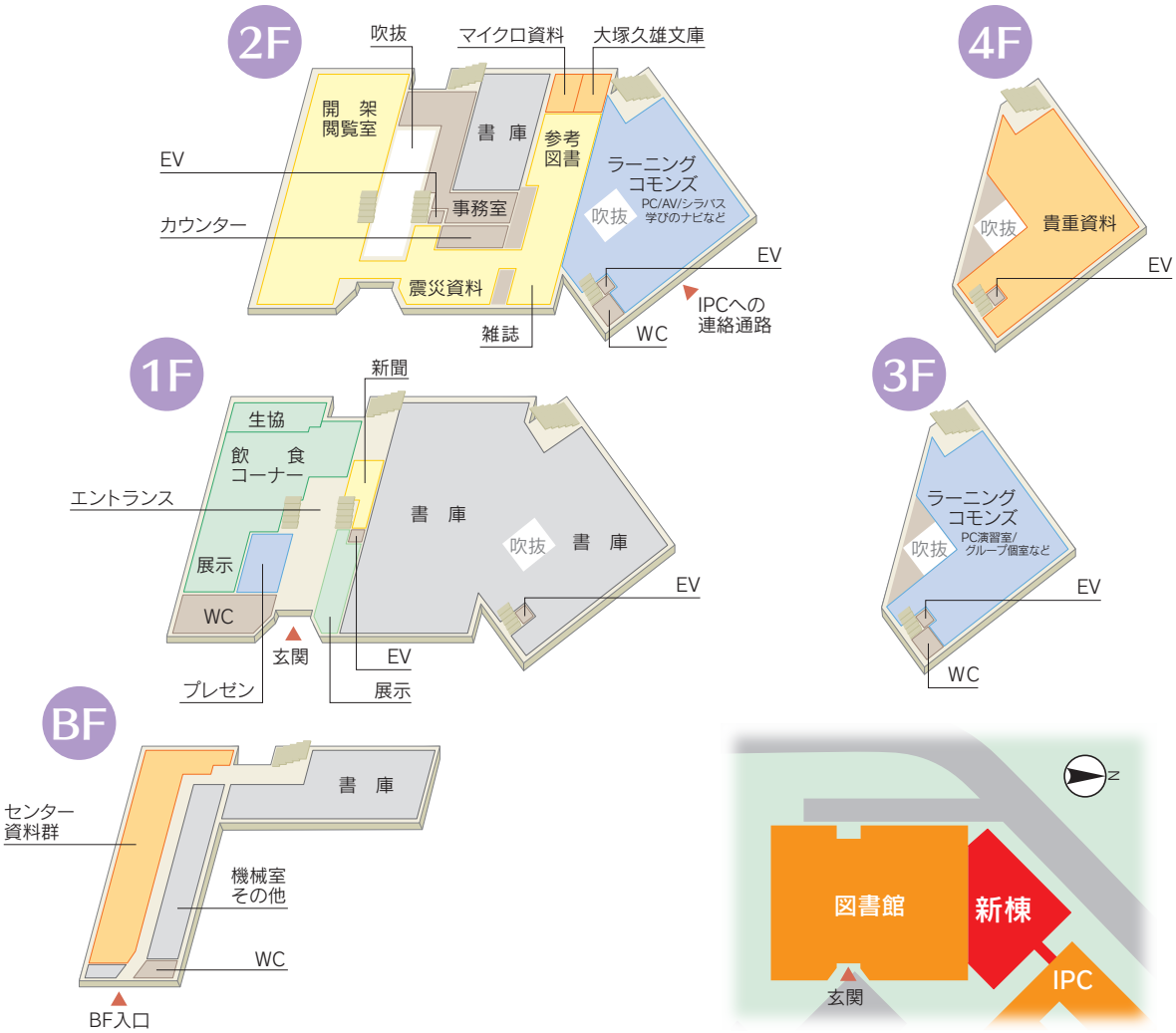
このような従来からの計画を踏まえ、実際の工事計画を策定するにあたっては、①ラーニングコモンズの要件と試行で得られた利用動向　②震災関連資料コーナーの位置づけ　③蔵書及び既存の設置機器・特設コーナーの有効活用　④静かな図書館空間を期待する利用者への配慮（音のゾーニング）という点を考慮しました。

リニューアル後は、改修した図書館棟及び新棟の各資料群・機器・スペースが相互に影響し合い、学びの刺激や喜びに出会える空間、知の交流が生まれる施設となることが大いに期待されます。

長期に渡る工事となる上、既存の図書館棟が停電となり、騒音・粉塵が発生することから、やむを得ず図書館を閉鎖することとなりました。利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

〈工事による図書館閉鎖（休館）〉
2014年7月1日～2015年4月26日［予定］
（部分再開 2015年4月27日～（既存棟のみ）［予定］
全面開館 2015年6月1日～［予定］）

工事完了後のエリアイメージ



学内教員著作寄贈図書

『けんこうなせいかつ：小学校低学年・児童用学習書：保健学習教材』

健学社　2013.8

浜島京子　石黒美穂編著

現代社会において、子どもを取り巻く環境は大きく変化し、それらは、子ども達の生活面にも影響を及ぼしている。例えば、メディアとの関わりが増大する中で、基本的な生活習慣が乱れ、心身に不調を来す子どもが増加している。また、家庭の中での子どもはお客様化する傾向にあり、家族の一人として手伝いをしたり、積極的に関わることが大きく減少している。一方、食生活においては、動物性脂肪等の摂取が増加し、野菜や魚を敬遠する子どもが増えている。さらに孤食や個食等、家族の食卓の問題も取り沙汰されている。

子どもにとって、毎日の家庭生活のあり方は、健康な心身を育成する上で最も重要であり、学校教育においてはできるだけ早い段階から健康生活に関する教育を強化していく必要があると考える。そこで、現在、保健や家庭科が設置されていない小学校低学年を対象に、健康な生活について考え実践できることを目的として、本書（児童用学習書）を作成した。内容は、規則正しい生活・食事・歯と目の健康・運動と清潔・大切な命・安全な生活の6項目で構成した（CD-ROM付）。

『ふくしま再生と歴史・文化遺産』

山川出版社　2013.11
阿部浩一　福島大学うつくしまふくしま未来支援センター編

本書は2013年2月に開催された同題のシンポジウムでの講演および個別報告を主に、関連する新稿を加えて編集したものである。

3・11の東日本大震災の経験を踏まえ、震災・原発事故を題材に刊行された図書は枚挙にいとまがない。しかし、真の地域再生において欠くことのできない「心の復興」を支える地域の歴史や文化の問題を正面から取り上げた類書は少ない。その意味でも貴重な成果といえる。

日本中世史の碩学である五味文彦氏の基調講演を巻頭に配した本書のメインは、ベールに包まれていた旧警戒区域の歴史・文化遺産の被災状況と文化財保全活動の実情が、県文化財課担当職員、双葉町・大熊町・富岡町の博物館に勤務していた学芸員、そして地元出身で自宅からの資料搬出に取り組んだ大学院生など、最前線の当事者たちによって公にされたことである。彼らの過酷な経験から発せられた言葉の数々は、災害から地域の歴史・文化遺産を護ることの意味を、強い説得力をもって私たちに訴えかけてくる。そして震災ミュージアム設立の提言は、福島で文化財保護に取り組んだ多くの関係者たちの願いでもある。

その一方で、飯舘村の文化財レスキューに端を発した村民のための文化祭、須賀川市の文化財救出と地元住民の活動、福島大学の教員・学生たちによる歴史資料所在調査の取り組みは、震災経験をばねにした未来志向の新たな試みでもある。

福島県での歴史資料をはじめとする文化財等の保全活動は、不幸にして震災と原発事故を機に本格化したわけだが、それを一過性のものに終わらせてしまっては意味がない。福島県内で専門家と自治体関係者、学生、地域住民が手を携えて取り組んでいる歴史資料保全活動は「その気になれば誰でも歴史や文化の保護に関わることができる」ことを示した好例である。

なお、2014年6月、本書の刊行を始めとする諸活動が福島県での文化財保護に寄与したとして、第15回和島誠一賞（団体賞）を受賞したことも付記しておきたい。

『自治体再建：原発避難と「移動する村」』

筑摩書房　2014.2
今井照著

本書で書きたかったことは次の3点にあった。第一に、原発災害が発生した直後、福島の自治体がどのように行動したか、それが市民の生命と安全を守るための最低限の行動として、いかに重要だったかということについてである。さまざまな調査報告やルポで散発的に語られてきたが、これまでまとまったものはなかった。福島にある大学として、将来のためにこのことは記録しておかなければならないと思った。

第二に、この経験からそもそも自治体とは私たちにとって何だろうかということを考えたかった。同僚である荒木田岳さんの研究業績からインスパイアを受けて、近世の「移動する村」からその考察を試みている。錯誤に満ちた「平成の大合併」によって、地域の政治・行政をぼろぼろにした東京政界への対抗軸を作るという意味も込めた。

第三に、3年を経てさらに過酷な環境を強いられている避難者の人たちに対して、いま政策・制度として何ができるかという提案を改めて提起することだった。順次避難指示が解除されて「帰還」が進むと、ほとんどの避難者は「自主避難者」化され、「勝手に避難している人」にされてしまう。この結果、支援や賠償が打ち切られ、直接的な生活苦にも直面する。特に「避難継続」者の法的地位の確立を「第三の道」として提案している。

本書の反響は大きいが、残念ながら社会を動かすまでには至っていない。ぜひ福島に関係する人たちにも広く読んでいただきたい。

『フクシマで"日本国憲法〈前文〉"を読む：家族で語ろう憲法のこと』

公人の友社　2014.2
金井光生著

2011年3月11日の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故の大惨事から3年余りが経過した。地震・津波・原発事故・風評被害という四重苦に苦しむ福島では現在でも、故郷も仕事も失い避難生活を強いられ自己の権利保障もままならない人々が大勢いる。しかし全国的には3・11原発震災は確実に風化し忘却されつつあり、それどころか、タカ派保守主義の第二次安倍政権と自民党は、被災者・被曝者への配慮も党の政策の反省も欠いたまま、原発再稼働と日本国憲法の保守的壊憲へと突き進んでいる。

本書は、改憲/護憲を主張する前に主権者として当然知らなければならない「法と道徳感情の区別」、「立憲主義」、「憲法と法律の違い」などの憲法学の基本常識を確認しながら、特に、原発震災を被ってしまったフクシマという独自の観点からnuclearよりもnew-clearな国家を目指して「平和的生存権」を中心に現行の日本国憲法前文を分かりやすく解説する。

福大生の必読の入門書である。これ以上、「想定外の事態」を招かないように―。

『農の再生と食の安全：原発事故と福島の2年』

新日本出版社　2013.9
小山良太　小松知未編著

本書は「現実に起きた原子力災害への対策」に論点を絞り、理論論と実践論を凝縮させた１冊です。

うつくしまふくしま未来支援センターの食・農復興支援担当のメンバー（小山良太・小松知未・石井秀樹・朴相賢・平井有太）と、連携研究者（高瀬雅男（経済経営学類）、高橋祥世（北海道大学））が、原子力災害から２年間行ってきた支援・研究活動をもとに執筆しました。

本書では、チェルノブイリ事故後のベラルーシ共和国の農業対策と福島の現状の国際比較を踏まえ、原発事故による被害と課題を多角的に整理しています。その上で、農地の放射線量分布マップ作成など科学的な現状分析を行うことで、今後の展望を見いだせることを提起しています。

また、放射能汚染と正面から対峙し、多様な主体と連携しながら自らの道を切り開こうとしている農業・農村現場の姿とその意義をまとめています。原子力災害からの復興への糸口を探す多くの方に、ぜひ読んでいただきたい本です。

『東北発 災害復興学入門：巨大災害と向き合う、あなたへ：災害復興学テキスト』

山形大学出版会　2013.9
清水修二　松岡尚敏
下平裕之編著

いくつかの大学の教員が共同執筆で教科書を発刊するのはごく普通のことです。けれども複数の大学が、大学として共同で一つの教科書を編むというのは、ちょっと珍しいことではないかと思います。その珍しい試みが実現しました。福島大学、山形大学、宮城教育大学、この三大学の学長が震災後に共同声明を出し「災害復興学」を作っていこうと声を上げました。それが『東北発 災害復興学入門』出版の形で実を結んだのです。

東日本大震災および福島原発事故で私たちが目の当たりにしているのは、大災害は発災時点で大きな被害を生むだけでなく、その後に長い「復興」の仕事を人々に課すということです。特に原発事故の場合、それは数十年にもわたる難事業になります。この本ではそうした長いスパンの課題も視野に入れながら「災害復興とは何か」を分かりやすく論じています。学生諸君が手に取りやすいよう破格の低価格となっているのも特徴です。講義やゼミで使っていただければ幸いです。

図書館総合展in白河（報告）

情報サービス担当
門間　泰子

図書館総合展とは、図書館職員はもちろん、図書館関連企業や一般の方が参加し、図書館の課題や展望を共有し、立場や業種を越えてつながるイベントです。例年横浜で開催され、多様なフォーラムやポスターセッション、ブース展示が企画されていますが、この横浜開催とは別に、それぞれの地方の事情やテーマを反映した「図書館総合展フォーラム in 地方開催」が各地で展開されています。

3月3日に白河市立図書館で開催された「図書館総合展in白河」は、「東日本大震災と福島－震災後の情報提供」「オンラインデータベースの活用－その課題と可能性」という2つのテーマがあり、オンラインデータベースについての福島大学の事例を紹介することとなりました。白河市立図書館の職員の方、現在本学でも導入している「JapanKnowledge」「ヨミダス歴史館」の提供元の方々とパネルディスカッションを行い、図書館側が抱える課題を共有したり、企業側が努力している部分やこれから目指している方向を知ったりする機会となりました。

また、もうひとつのテーマである東日本大震災については、南相馬市・福島市・白河市の被災当時の状況や現在も抱える課題を聴講しました。このテーマは見聞きする機会が数多くありますが、その度に、災害が完全に終息しているとは言い難い本県の難しさを感じます。しかし、「FUKURO_フクロウ_」（福島大学学術機関リポジトリ）による所属教員の研究成果情報公開や「震災関連資料コーナー」の提供等、大学図書館ができることを、引き続き模索していきたいと思います。

出展ポスター：（左）震災関連資料コーナー
（右）ふくふくネット（福島県立図書館／福島県立医科大学附属図書館との共同作成）

目　次

- 館長就任のご挨拶 …… 千葉　悦子（1）
- 附属図書館　増築改修工事 …… 情報サービス担当（2）
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
  - 『けんこうなせいかつ：小学校低学年・児童用学習書：保健学習教材』 …… 浜島　京子（3）
  - 『ふくしま再生と歴史・文化遺産』 …… 阿部　浩一（4）
  - 『自治体再建：原発避難と「移動する村」』 …… 今井　照（4）
  - 『フクシマで“日本国憲法〈前文〉”を読む：家族で語ろう憲法のこと』 …… 金井　光生（5）
  - 『農の再生と食の安全：原発事故と福島の2年』 …… 小松　知未（5）
  - 『東北発 災害復興学入門：巨大災害と向き合う、あなたへ：災害復興学テキスト』 …… 清水　修二（5）
- 図書館総合展in白河（報告） …… 門間　泰子（6）